

奈良古墳群散策マップ

奈良古墳群には、現在 13 基の古墳があり、全て見学可能です。石室の構造を観察したり、古墳時代と変わらぬ風景に思いを馳せたり、自由な時間をお過ごしください。

CAUTION

- * 墳丘を崩さないようにご注意ください！
- * 露出した石室は崩れる恐れがあるので登らないでください！
- * 石室が崩れる恐れがあるため柵の内側には入らないでください！

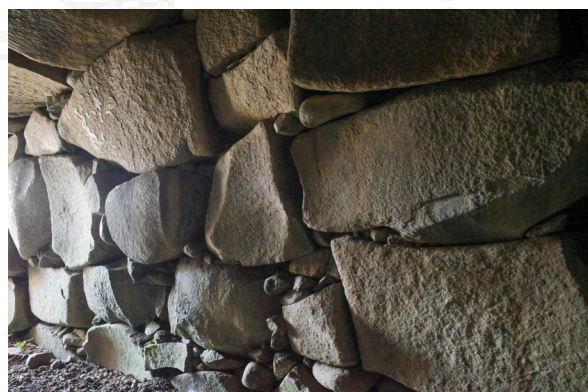
沼田台地の向こうに子持山が見える。古墳時代と変わらぬ風景



2号墳玄門部分の扉石



風化した2号墳の天井石
露出してから年月もまた歴史



美しく積まれた
7号墳玄室側壁

夕号墳



石室が露出。玄室と
玄門部のみ残存。

1号墳



遺存状況悪い

16号墳



玄室と羨道の一部残存。
玄門部分には扉石が残
存し玄門部の構造がよ
くわかる。

2号墳



玄室と羨道
の一部が残存。

3号墳



玄室のみ残存。天井
石が崩落している。

4号墳



玄室天井石が露出。

5号墳



古墳群中最も規模が大きい。玄室と
羨道の一部が残存する。玄室は長大
で高さがあり、石室内が観察可能。

7号墳



大きな一枚板の玄室
天井石が露出している。

11号墳



古墳群中最も古く、希
少な平面「ト」字型の
石室。玄室のみ残存。

10号墳



玄室後ろ半分のみ残
存する。玄室奥壁や
玄室断面型がよく観
察できる。

9号墳



玄室のみ残存。厚み
のある天井石が露出
し、並んでいる。

8号墳



6号墳



● 古墳

■ 史跡指定範囲

0

50m



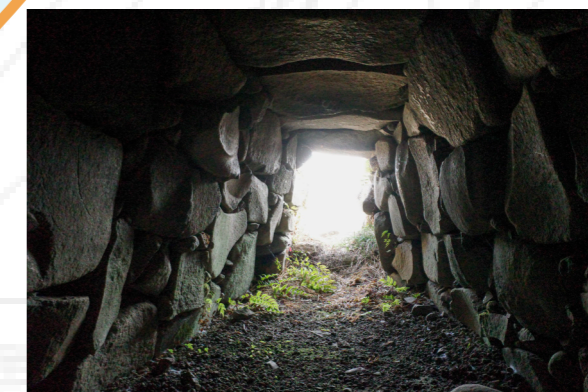
「ト」字型の10号墳玄室。左が奥壁、
右が側室。ここ以外では高崎市お春
名古墳のみが知られる。



7号墳玄門



一枚岩を用いた
7号墳玄室奥壁



7号墳玄室
から外を見る

奈良古墳群へのアクセス



沼田市歴史資料館

- 奈良古墳群の出土遺物は、沼田市歴史資料館で一部展示しています。
- 〒378-8501沼田市下之町888テラス沼田2階
- TEL 0278-23-7565 駐車場あり
- 休館日 毎週水曜日(祝日の場合は翌平日) 9:30~17:00(入館は16:30まで)
- 観覧料220円(中学生以下無料、障がいのある方と付き添いの方1名無料)



奈良古墳群散策マップ 2020年3月
沼田市教育委員会文化財保護課
TEL 0278-23-2111
bunkazai@city.numata.lg.jp

奈良古墳群を動画で観察!



群馬県史跡奈良古墳群
ドローンによる美しい
景観映像を集めました。



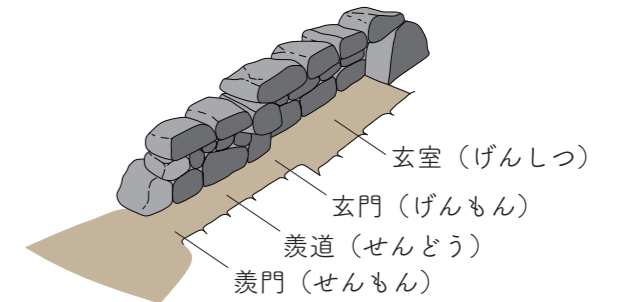
奈良古墳群 VRツアー
360°カメラで石室内を
自由自在に観察!ト字型
石室も一目でわかる。

群馬県指定史跡

奈良古墳群散策マップ

奈良古墳群の概要

群馬県指定史跡 奈良古墳群は、沼田市奈良町に所在する、13基からなる古墳時代終末期の群集墳です。昭和30年の群馬大学の調査では、古墳の痕跡と推測されるものも含めて59基の分布が確認されましたが、開田事業により、多くの小規模古墳が破壊されました。また、平成11年には土地改良事業に伴い9基の古墳が発掘調査されました。古墳の構造は、いずれも埋葬施設として横穴式石室をもつ円墳と考えられます。墳丘(盛土)は開墾により削り取られた部分が多く、石室のほとんどは露出・開口しています。



横穴式石室の模式図

古墳時代終末期の群集墳

古墳時代終末期になると、横穴式石室を用いた小規模な円墳を密集させる群集墳が形成されます。横穴式石室は追葬が可能で、石室内には血縁関係にあると考えられる複数の埋葬者がみられることが多く、また群集墳は一定地域の社会集団により形成されたと考えられています。奈良古墳群は、奈良町周辺に存在した社会集団が、自分達の墓域として奈良古墳群の地を選び、古墳を造り続けた結果形成されたものと考えられます。

出土遺物の内容

開墾時の採集あるいは発掘調査による出土遺物は馬具類が充実している点特徴で、古墳群を形成した集団は馬の生産に関わっていた可能性が高いと考えられています。これらの出土遺物280点が昭和52年に市の重要文化財に指定されました。



金銅製杏葉(こんどうせいぎょうよう)

古代群馬の馬生産

日本社会への馬導入は、古墳時代中頃から始まりましたが、群馬県の榛名山東南麓地域は東国有数の馬生産地でした。馬は古墳時代にあつては権力者の権威の象徴でしたが、7世紀後半以降の律令国家にとっては中央と地方を結ぶ情報伝達手段として、また東北政策のため軍馬として重要でした。奈良古墳群の存在は、7世紀に馬の生産地が群馬県北部(利根・沼田)地域にまで拡大したことを示すとともに、日本社会における馬需要の増大と国家的生産体制が整備されていく状況を示しています。



鉄生壺鐙(てつせいづばあぶみ)